

今回は日本経済新聞の記事から“アップルの捨てる決断”を紹介します。21 世紀の最初の 10 年が過ぎつつあるが、この間最も輝いた企業はどこだろう。独断と偏見で選ぶなら、経営危機の瀬戸際から、「株式時価総額でIT(情報技術)企業の世界一」にまで復活した米アップルの名を挙げたい。十数年前のアップルは内紛や商品戦略の失敗が続き、お粗末の一言。旗艦「マッキントッシュ」は昔からのファンを引き留めるのが精いっぱい、IT革命が生んだ新規のユーザーは競合のマイクロソフト陣営に持って行かれた。今はやりの言葉を使えば、世界の大勢から孤立し、仲間内で盛り上がる「ガラパゴス商品」の色彩が強かった。

創業メンバーだったスティーブ・ジョブズ現最高経営責任者(CEO)が 1997 年にアップルに復帰して真っ先に手掛けた仕事は何だったか、アップル全盛の今しか知らない若い読者にとっては驚きだろう。ライバルであり、旧知の仲でもあるマイクロソフトのビル・ゲイツ会長(当時)に、二つのことを頼み込んだ。一つは「ワード」などマイクロソフトの応用ソフトをアップル製品でも動かせるよう改良してほしいという依頼、もう一つは資金援助(出資)だ。幸いこの二つの頼みをゲイツ氏は応諾し、アップルは辛うじて命脈をつないだ。

そこまで追い詰められたアップルが復活できた原動力は何か。大きかったのは「捨てる決断」である。同社は 2001 年に従来の基本ソフト(OS)に見切りをつけ、「OSX(テン)」と呼ぶ新OSに切り替えた。コンピューターの頭脳であるOSの全面刷新は半端なことではない。OSがバージョンアップではなく新規のモノに切り替われば、以前のOSに準拠した応用ソフトや使い手の熟練は水泡に帰す。古くからのアップルファンには抵抗もあったが、ジョブズ氏の決断で押し切った。その理由は、多機能端末「iPad(アイパッド)」をいじってみれば、すぐ分かる。iPadの使い勝手はパソコンというよりテレビに近い感覚で、電源を入れるとほぼ同時に画面が立ち上がる。競合ソフトに比べて、アップルのOSがそれだけ「軽い」からだ。旧OSにしがみついたままではアップルを支える商品競争力は生まれず、今日の繁栄はなかつただろう。「捨てる決断」が功を奏したのである。

さて、いまの日本を見渡せば、以前のアップルのような会社が多いのではないか。過去にはそれなりの実績があるが新時代に対応できず、展望が開けない。そんな時は従来の経営の「基本ソフト」を捨てて、新たな道に踏み出すのも一案だろう。国内生産にこだわってきたが、海外生産に軸足を移す。高付加価値路線をやめて、廉価品路線にカジを切る——。やみくもに過去を否定しろとは言わないが、未曾有の環境変化に直面する今の企業にとって「捨てないリスク」「過去にしがみつくりスク」は日々大きくなっている

1) 世界の大勢から孤立し、仲間内で盛り上がる商品を何といいますか？

()

2) スティーブ・ジョブズ現最高経営責任者(CEO)が 1997 年にアップルに復帰して真っ先に手掛けた仕事は？2 つ上げてください ()

3) 追い詰められたアップルが復活できた原動力は何ですか？

()

4) iPadの使い勝手の特徴は？()

()